資料１－４

河川工作物アドバイザー会議の経過報告・今後の予定

１　河川工作物アドバイザー会議の開催状況

平成２３年４月１４日　　第一回開催
平成２３年６月２３日～２４日　第二回会議（現地検討会）
平成２４年１月２７日　　第三回会議

２　河川工作物の改良状況（平成２３年度）

河川名	基数	事業内容	工事の状況
羅臼川	１基	・スリットダム化	スリット３本のうち、２本完了 （平成２４年８月完成予定）

※河川工作物ＷＧにおいて改良が適当と判断された１３基のうち、１２基が改良済みであり、残る１基は改良工事中。

３　遡上モニタリングの状況

イワウベツ川及びチエンベツ川でサケ科魚類の遡上状況等を調査し、改良済みダムの上流まで遡上していることを確認。

４　河川工作物アドバイザー会議における主な議論

第２回ＡＰの論点整理などを踏まえ、別紙のとおり議論を進めたところ。

５　今後の予定

①　最後の改良箇所となる羅臼川については、来年度改良工事終了予定。
②　来年度は、改良が必要とされた１３基のダムの改良が終了することから、総括的な取りまとめを実施（別紙参照）。
③　ピリカベツ川は遡上数が非常に少ないことから、来年度のモニタリングについてさらに検討。

※参考

改良工事実施時期とモニタリング調査計画

河川名	工期	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27
イワウベツ川											
赤イ川	H18 ～ 22	▲	⟷	★	▲	▲	⟷	⟷	⟷		
ピリカベツ川	H19	●●	▲▲	⟷	⟷	⟷	⟷				
ルシャ川		●●	⟷	⟷	⟷						
サシルイ川	H19			⟷	⟷	⟷					
チエンベツ川	H20 ～ 21			●	●⟷	⟷	⟷	⟷			
羅臼川	H21 ～ 24				●	→	→	→	⟷	⟷	⟷

▲：改良工事（北海道森林管理局）　★：改良工事（斜里町）
●：改良工事（北海道庁）　⟷：遡上モニタリング期間

注）上記表の▲、★、●は、それぞれ１基の河川工作物を示している。
羅臼川の河川工作物の改良は、１基の工期が４年となる予定。
ピリカベツについては、河川 AP の議論から４年間モニタリングを実施。

別紙

平成２３年６月開催　河川工作物ＡＰ論点整理	平成２４年１月開催　河川工作物ＡＰにおける左記論点の議論
【河川工作物 AP の今度の進め等について】 ○今後の河川工作物ＡＰの方向性や計画についての検討が必要。 ※長期的な計画を立てる必要があるのではないか。 ※河川工作物 WG において、グレーとなっているダムについて、再検討してはどうか。 ○今後は、遡った魚が自然再生産できる環境等についての検討が必要。 ※ダム改良により、サケ科魚類が上流まで遡れる環境となった。今後は、遡った魚が自然産卵し、世代交代が出来るような環境が必要ではないか。 ○流路工、玉石連結工などについては検証が必要。 ※イワウベツ支流赤イ川において工作物に係るモニタリングを３年間実施し検証していくことで事務局より説明。実施に当たっての指標については、各委員のご意見を伺うことを確認。	○改良をすることが適当とされた１３基のダムについて、来年度全て改良が終了となることから、来年度は改良した１３基のダムで行った工法や改良した結果の是非などの成果や課題等について、総括的に取りまとめ検証し、情報発信を行うことを確認。取りまとめに当たっては、行政側が評価するのではなく、河川工作物 AP の委員を中心としたワーキング方式で外部評価を行うことを確認。 ○また、河川工作物 AP の今後のあり方については、長期的なモニタリング調査やグレーダムの検証等課題はあるが、上記の総括を踏まえた上で新たに提案する旨事務局より説明。
【長期的なモニタリング計画について】 ○長期モニタリング対象河川（案）として、ルシャ川、ルサ川、ホロベツ川を提案。 ※人為的なかくらんが少ないテッパンベツ川でのモニタリング要請があり、事務局として次回の河川工作物ＡＰまで預かりとした。 ○サケ遡上に関する長期モニタリング手法としてふさわしく、かつ現実的な手法はどのようなものか ※事務局より、サケ遡上調査手法（案）として、遡上数と降下数に基づく調査（台形近似法調査）及び産卵床調査を提案。台形近似法調査については予算の事情があり、調査頻度等について、今後、委員のご意見を伺うことを確認。 ※日本森林技術協会より林野庁事業である気候変動影響のモニタリング等事業のうちオショロコマ調査計画（案）を説明。本事業が４年間で終了することから、終了後は事務局で引き継ぐことで説明。なお、実施に当たっては予算の事情等から、調査手法及び調査頻度等について引き続き議論していくことで確認。	○事務局より、サケ科魚類モニタリングについては、 ①対象河川として、改良河川と自然河川、斜里側と羅臼側との配分及び予算面等を考慮し、ルシャ川とルサ川とすること、 ②対象魚種はカラフトマス、遡上量は河口付近に設けた定点において遡上数と降下数をカウントすること、 ③来年度（2012 年）はヒグマによる調査への影響や必要経費の検討などを行うため試験的に実施し検証を行い、この結果を踏まえ、カラフトマス豊漁年にあわせ２０１３年より隔年で実施すること、 等を提案。 ○委員より、ＩＵＣＮが注目しているルシャ川のベースラインとしてテッパンベツ川の調査が必要との指摘があったことから、ルシャ川及びテッパンベツ川での調査を優先するとともに、ルサ川の調査も可能となるよう努力することを確認。また、調査方法等については、委員の意見を伺いながら実施することを確認。 ○オショロコマ調査については、林野庁事業である気候変動影響のモニタリング等事業により来年度中に調査手法が策定・提案されることから、これを引き継ぐことを確認。なお、当該事業に参画している研究者より、１０～２０河川程度を対象に、年２～４河川を５年で一巡するような継続的なモニタリング調査を提案されたところ。